

### 第三章 信仰のめざめ

高松高等商業学校への入学は、ある意味では、正芳にとって家庭の束縛からの離脱であった。寄宿先の叔母（ヨシ、母サクの妹）の家は、東讃、大川郡の津田という海浜の町で、通学には汽車で一時間ほどかかったが、それまで学業以外のほとんどの時間を野良仕事や副業に占拠されていた正芳は、はじめて自分自身の勉学と思索に専念できる時間を持つことになった。

そういう彼の耳に一つの雷鳴が轟き、稲妻は、彼の前に思ってもみなかった世界を照射した。それは、正芳の入学後間もない昭和三年四月、一人の宗教家が来高し、講演を行った時にはじまる。宗教家の名前は佐藤定吉（当時東北帝国大学教授）、演題は「科学と宗教」であった。

佐藤定吉は徳島の人。京都の第三高等学校の理科に進んだ。ここで片山哲（のち日本社会党委員長、内閣総理大臣）らの友人を得てYMCAに入り、キリスト教に近づいたのち、東京帝国大学工科大学応用化学科に入った。大学卒業の折には、末弘厳太郎、金森徳次郎らとともに恩賜の銀時計を拝受したという英才である。その後米國へ留学、大正八年（一九一九年）には、東北帝大在職のまま東京・下落合に、「佐藤工業研究所」をつくり、ここで大豆蛋白の合成樹脂を發明して、「サトウライト」と名付けた。今日のプラスチック時代の草分けである。

大正十年頃から、日本救世軍の山村軍平を助けてキリスト教の伝道を始めるが、五女が疫癘に罹って死去したのを機に、召命を受け、全国の高等学校および大学の学生の中へ飛びこんで、学生に伝道を始めた。昭和二年には佐藤を中心とする

『イエスの僕会』が設立され。東京をはじめ全国各地にその支部ができ、同年八月には第一回修養会が浅間山麓で開催された。

『全東洋をキリストへ』という当時の佐藤の教理は、『イエスの僕会宣言』の中で次のように要約されている。

一、我らは純福音聖書信仰に立つ。

二、我らは神道・儒教・仏教・武士道を東洋的旧約と認め、キリストの福音による新約日本の建立を念願す。

三、我らは東洋的天分を以て基督教の真理の光をその完全なる姿に於て仰がんとす。

四、我らは全東洋を基督へ捧ぐる為に献身努力するものとす。

五、我らは使徒的人物を求めて初代基督教の復興を念願す。

六、我らは人生に於ける一切の諸問題（科学・政治・産業・教育等）を神中心の立場に於て再認識し且つ建設せんとす。

七、我らは教派・信条・階級を超越して、キリストに在りて皆一つとならん事を念願す。

正芳が佐藤定吉に出会ったのは、佐藤が本格的な伝道を始めて二年、運動が最高潮をむかえようとするときのことであった。

佐藤がこのときのような講演をしたかは明らかでないが、『佐藤定吉先生追想録』にはいくつかの講演記録が収められており、これによってほぼその概要を推察できる。

佐藤の講演内容は多岐にわたっているが、大別すると、一つは、物質文化偏重の時代趨勢を戒めて宗教と科学の高次元における統一を説いたもの、もう一つは、イエスを媒介とする神体験を説いたものである。

前者に属する彼の演説の特徴は、その焦点を、当時の日本文明のあり方そのものに求めるところにあった。彼は言う。

「明治大正の時代は、日本の文化史上実に驚くべき長足の進歩をなした時代であった。物質文化の大伽藍は見事に建立された。けれどもそれは畢竟内部的には頗る空虚な伽藍堂に過ぎなかった。真に人間文化建設の具として十分に活用せられてゐなかつたのである。左甚五郎の手に握られた鋭利なる鑿のみにして、始めて活けるが如き人間が刻み出されてくる。物質

文化のこの鑿を真に活用し得る腕と力を持った人物が、従来我が祖国にあまりに少な過ぎたといふ事が、今日の禍ひと悩みを生み出したのである。内部的力の不足が失敗の主要な原因であった。消化し切れぬ脆弱な胃袋を持ちながら、無限に詰め込まれた物質文化の糧は、遂に祖国日本の健康を書してしび、社会を中毒せしめ、今日の如き下痢症を起さしめたのである。

宗教家としての佐藤のこうした日本に対する関心は、『イエスの僕会宣言』の中における『神道・儒教・仏教・武士道を旧約とし、新約日本の建立を念願す』とあることに通じ、のちに彼を皇国神学の道に向かわせることになるが、この一連の講演は、昭和の暗い時代にさしかかって悶々としていた当時の青年たちの、きわめて大きい共感を呼ぶものとなった。佐藤が東京帝大銀時計組の俊英科学者だったという事実も、これに寄与していたにちがいない。

佐藤は、この若き共鳴者たちにむかって、没我の心で神と合一することを説いた。共鳴者の数が多く、その力が強くなればなるほど、理想の国日本が実現される、というのがその教理であった。そのため使徒を佐藤は学生の中に求め、その使徒に対して大衆に訴えかけることを要請したのである。

『イエスの僕会』のメンバーであったものの記すところによると、佐藤の講演は舌端から火を噴くというのがふさわしいほど激しいものであった。学生たちの中には、講演が終わると演壇に駆けあがって、佐藤の手をつかみ、涙を滂沱と流しながら、佐藤の門下に加えられることを願うものもいたという。佐藤には一種のカリスマ的な魅力がそなわっていたのであろう。

前年に父の死を経験し、厳しい生活環境の中から笠を負うて出てきて、都会高松の刺激に満ちた新しい環境の中で、それまでおよそ思想とか宗教とかに触れる余裕のなかった十八歳の正芳は、魅せられたように、この佐藤の噴きだす弁舌の嵐にまぎこまれた。そして、少なからぬ学生たちとともに佐藤の門をたたき、『使徒』の一人となることに意を決した。

野戦 と呼ばれた路傍伝道に、十字架の印のついた提灯を持って参加し、自ら街頭でイエスの導きを説くようにもなった。また、休みの日には、同じくイエスの僕会の会員の下宿に集まり、互いに人生や神について語りつつ、祈禱や信仰告

白を行うようにもなった。

この仲間の一人、高松高商で一年先輩の山本新太郎（のち三井物産勤務）はこう回想している。

「祈禱会は、自分の精神的な悩みや家庭的な悩みなどを告白して、最後には神さまにお願するというかたちでした。大平さんは一番熱心で、涙を流しながら告白していました。神の前に謙虚に、幼子のようにへりくだるのが一番大事だと、当時われわれは考えていましたから、感謝して涙を流すのは自然なことでした。」

正芳がどれほどこの運動に打ち込んだかは、佐藤の講演を聞いた直後の夏に、浅間山麓千ヶ滝の山荘で開かれたイエスの僕会第二回修養会に参加したことから想像がつく。

さらに正芳はその年の十二月二日、東京・青山会館で開かれた一般市民を対象とする大伝道講演会に参加するため、高松からはるばる上京した。

「これには全国から僕会の猛者連が集まり、この学生弁士の中には四国の高松高商から駆けつけた後の外相大平正芳兄の紋付き羽織はかまといういでたちもあって熱弁がふるわれた。」（『佐藤定吉先生追想録』石黒美種の回想）

このときは、イエスの僕会の東京帝大グループの中心メンバーであつた出射義夫（のち千葉地方検察庁検事正）も記憶している。

「山だしの純朴な好青年という印象でした。佐藤先生の指示でわれわれ若い者がしゃべるのですから、そんなに高い次元の話ではありません。大平君は、上手ではありませんが、大声で非常に熱のある話をしていました。」

正芳が入学して、イエスの僕会の運動に参加した昭和三年は、日本の政治と経済の転換期でもあつた。この年二月に普通選挙法による最初の総選挙が行われ、民主主義と政党政治は大きく前進したようにみえた。しかし、当時は第一次大戦のブームが去り、戦後恐慌に見舞われた日本経済が、大正十二年の関東大震災で打撃を受けていた。昭和二年には金融恐慌が発生して、日本経済は深刻な危機に直面した。陰鬱な雰囲気日本社会を蔽った。マルクス主義が若い学生たちの間に流行し、これに対して共産党関係者への大弾圧（三・一五事件や四・一六事件）が行われたのもこの頃であつた。

こうした時代の趨勢は、若い学生たちが佐藤定吉の主唱するような運動を支持する原因の一つともなっていた。事実、この時期には、厳しい取締りや運動の行詰りなどにより、マルクス主義に挫折した若者たちが、西田天香の主宰する一燈園はじめ、数々の修養団に、その悩み为解决を求めた例が少なくなかった。

しかし、正芳にとって、このキリスト教との出会いはそのような種類のものではなく、言うならば、それは、彼の思想的、宗教的な初体験であった。だからこそ、異常と思われるほどの情熱をもって、彼はこの運動に献身したのである。

こうした正芳が学んだ高松高商（のちの香川大学経済学部）は大正十三年（一九二四年）に設立され、正芳が入学した前年によく第一回の卒業生を出したばかりの新しい学校であった。沢田源一校長（のち旧制浦和高等学校長、旧制東京美術学校長）をはじめ、商業学の大泉行雄（のち香川大学長）、マルクス経済学の堀江邑一（たゞと争々たる教授陣のもとで、将来有為な士魂商才の実業家の育成という目的に向かって邁進中であつた。その後高松高商は、関西では神戸、彦根、山口、長崎などの各高商と並ぶ名門校として成長して行く）。

大平自身の筆によると、「私が入学した昭和三年といえは、ちょうどはなやかであつた大正デモクラシーの風潮が漸く色褪せてきたし、昭和二年の金融恐慌の余波も手伝つて、明るい展望がみえない何かしら重つたるい感じのする時代であつたように思われます。それでも校内にはまだロマンチックな雰囲気が滲れていたわけではなく、南国の明るい甘美な自然と相俟つて、自由で闊達な学園生活を楽しむことができました。」（同窓会誌『又信』昭和四十二年八月二十日号）

正芳は、高松高商二年の年（昭和四年）の夏、軽い湿性肋膜炎にかかり、しばらくの間微熱がつづいた。

「そのころ私は、どつしたものが、社会科学を学校で学ぶこと自体に興味を失いかけていた。たまたま病を得たので、強いて休学しなければならぬほどの病状ではなかったが、思い切つて休学を決意し、療養かたがた学校を続けるべきかどうか、今後の進路を考えてみることにした。幸い母も兄も、私のわがままを何とも言わないで許してくれた。

休学中、私は毎日のように、近くの山に登ることを日課としていた。肋膜炎は幸いに快方に向かった。その間、漱石の

小説を読んだり、内村鑑三先生の著作に親しむことができた。」(『私の履歴書』)

この文章だけでは、正芳の悩みの内容が何であったか、またそれがどれほど深刻なものであったのかはよくわからない。だが、自分でも全く思いもかけずに、熱烈なキリスト教運動家となってしまう若者が、それまで考えていた人生進路や信じていた価値観を大きく動揺させたとしても、これはごく当然のことと言えるであろう。

友人たちの話から察すると、彼はこの時期、キリスト教関係の本ばかりでなく、哲学や詩やエッセイをむさぼるように読んだ。特定の友人たちには、思索を交流する手紙を書き送った。前出の片木雅文によれば、「哲学のことが書いてあったり、英語がたくさん使われていたりしていた」という。

ところで、イエスの僕の会の組織においては、この会の趣旨に賛同して、そのために奉仕することを決意したものを「決心者」と呼び、これが同会の会員となる。会員の本質は一種の大衆運動家であって、普通の意味でのキリスト者であるわけでは必ずしもなかった。

「……佐藤先生の所説は、われわれに神に対する畏れの念を植えつけるには役立つが、その神がなぜ愛かについては、どうしても納得のゆくものではなかった。そのためには、キリスト教の教えをまたねばならなかった。したがって僕会の人々も、その後キリスト者としての道を歩んだ人が多く、先生の科学と宗教についての論説は、キリスト教への呼び水的な役割を果たしたものだ。」

私の場合も、その後聖書を通してキリスト教に進んだ。」(同前)

正芳が洗礼を受けたのは、この年の暮のことだった。受洗に関する書類を見ると、昭和四年十二月二十二日に、志願書を日本基督三豊教会に提出し、同二十七日、観音寺教会で、フカナン牧師により授洗されたとなっている。

おそらくこの頃のことであろう。三豊中学同窓生の三木俊雄(のち三菱セメント秘書課長)は、観音寺の海辺に行ったら、人気のない浜辺で一人しゃがんでじっと考えことをしている正芳の姿に出会った。三木に「何をしているんだ」と聞かれて、「高松高商へ行っているんだ」と答えたが、多くを口にしなかった。

昭和五年春、正芳は「転学の決心も、退学の決意もつかないまま」復学した。（『私の履歴書』）二回目の二年生である。このとき同じクラスになった橋本清（のち東京銀行常務）は、初対面から不思議にうまがあつて、一生を通じる友となつた。

「学生時代の彼は、幹事になって、他の連中が言うことを聞かないと、自分の誠意が足りないと言つて泣きだすくらい純清で、律義と献身の託身のような人間だった。……彼と私とは、性格が相反するほどでもないが、かなり違つていた。このためかえつてお互い間に倦みのない長い交流関係が続いたのかも知れない。……若い時代、お互いに取交わしたやや心情的だが客気の多い書翰は夥しい数に上るが、彼の手紙は借しくも戦災で全部灰になつてしまつた。」（橋本著『国際金融時政』）

手紙の内容は、到るところにカントやショーペンハウエル、ニーチェが出てくる、聞きかじりのペダンティックなものだつた、と橋本は言つた。

また、正芳と橋本は、堀江邑一教授のもとで開かれていた『資本論研究』に参加したが、二人とも少し右がかつていたので、マルクスには馴染まなかつた。

これを裏づけるのは堀江元教授の証言であり、彼は「大平君がぼくの資本論研究会にいたことは記憶していない」と述べている。若者が抱きがちな社会思想や運動への精神的傾斜は、『僕会』の運動によつて充足されていたのであろう。

ただ、ここで不思議なのは、それほど親しかつた友人の橋本に対して、正芳が自分のイエスの僕会における活動について、一切告げていないということである。橋本は「僕が無神論者なので、神の話をしても仕方がないと思つたからではないか」と言つた。しかし、毎夜のように街頭で伝道活動を行い、涙を流しながら信仰告白する多感な青年が、哲学や愛を語り合う親しい友人に、仮に相手が無神論者だと思つたところで、自分の信仰や伝道活動について口ばしらないということがあるものだろうか。もしあつたとしたら、それは、強烈な意志の力によるものである。それは、前章で触れた正芳の自己抑制力と無縁ではないかもしれない。

因みに、この当時、正芳の家族も、彼がそのような活動を行っていることは全く知らなかった。

ところで、話の順序が後先になるが、この当時、イエスの僕会の若者たちの溜り場になっていたのは、朝鮮で道知事をつとめたあと退職して高松に隠棲していた藤川利三郎という人の家であった。藤川の長女が熱心な活動家であり、その母も信者となつて、佐藤定吉が来高する折には、ここがその根拠地とされていた。

信仰仲間との語らいを求めたということもあつたらう。あるいは、はじめての異性も交わる機会に魅力を感じたということもあつたかもしれない。正芳は、この藤川家にひんぱんに出入りして、子供の一人のように家族に可愛がられた。

ここで注目してよいのは、正芳がまだ学生の身でありながら、イエスの僕会の一人の先輩のために、結婚のあつせんの労をとつたということである。この結婚話は、正芳が間に立って苦勞した結果、二年のうちに成就した。正芳の仲立ちで結婚したこの人は、「その間、大平さんはいつも影のごとく私どもの後楯となつてくれました」と語っている。正芳の母サクも、交際家で、しばしば結婚話をあちこちに持ちこんで世話をやいていたというが、正芳はその血をもひいていたのかもしれない。

しかし、学友の多くは、正芳のこつこつという面を全く知らず、彼は、小中学生時代と同じように、学内においては相変わらず目立たぬ存在でありつづけた。

病氣療養を終えて高商の二年に復学した時、正芳は、津田の叔母の家から高松市内に下宿を移していたが、三年に進級するにあたって、七番町の筒井家が彼に八畳間を提供した。筒井家の息子正夫が高松商業の出身で、高商中心のイエスの僕会に学外から協力者として参加していたクリスチャンだった縁である、筒井の記憶によれば、正芳は、食事や風呂は高商の寮で間に合わせ、部屋にいるときはもっぱら勉強に励むが、仲間と一緒に僕会の事業計画の打合せをしていた。

この春休みに、正芳は、彼を襲つたままさまな思いや悩みをまぎらすかのように、南四国へ無銭旅行を試みる。

「まず最初に、平家の落人が住む祖谷の奥に、その末裔を訪ねた。平家の軍勢が捧持していたという、草の織維で造った



「八幡大菩薩」と書いた幟のぼりを見せてもらつたためであった。

…… 祖谷から吉野川に沿つて、土佐に入り、大杉を経て高知市に向つた。無銭旅行のこととて、高知では旧制高知高校の宿直室に泊めてもらった。明るくて静かな城下町は、魅力的であった。浦戸湾をぬけて桂浜に行き、カリフォルニアに通ずる鰐ひよこ渺またる太平洋の煙波を見たときの感激もまた一人ひとであった。それから船で室戸岬を回り、甲の浦港で上陸した。汽船から渡し舟に乗つて陸に近づいたが、その夜の月はこよなく美しかった。甲の浦の小学校で一泊した後は、陸路徳島、撫養（鳴門）等で学友の宅を転々とし、高松に帰つてきた。その時、私のポケットの中には、文字どおり一錢玉が一つ残つていただけであつた。」（『私の履歴書』）

この旅行には後日談がある。「新学期になつて登校してみると、全校生徒に対する訓辞の中で、沢田源一校長が 先日高知に旅行した友人が、その道筋でたまたま君のところの学生と同行した。自分はその学生の飾らない、礼儀正しい態度に好感をもち、彼との会話を快く楽しむことができた。彼を通じて、君のところの校風がしのばれる、という述懐をきいて、自分はいへんうれしかった というような話をされた。私は これはつきり俺のことを言っているのだなあ と思つたことである。」（同前）

正芳が三年に進級した昭和六年には、日本の経済は異常な困難のまつただ中であつた。すなわち、その前々年の一九二九年（昭和四年）十月二十四日には、ニューヨークのウォール街で 暗黒の木曜日 と言われた株価の大暴落が発生し、これに端を發した大恐慌の波が世界をおおつにいたつた。それまでの経済危機を緊縮財政、金解禁という政策によつて切り抜けようとしていた日本は、この世界恐慌の衝撃によつて、深刻な危機に陥つた。いわゆる昭和恐慌である。正貨は際限なく海外に流出し、昭和五年の物価は前年比約十八パーセントの暴落、輸出の減退は三十パーセント余に及んだ。昭和六年になつても事態は一向に改善されず、物価は前年比十六パーセント減、輸出も二十パーセント低下した。不況はますます

まず深刻化して、企業倒産があいつぎ、農村の疲弊は筆舌に尽しがたいものがあった。

正芳の同世代の学生たちは、このような環境の中で、自分の針路を決めなければならなかったのである。

正芳と同じ年に卒業した太田誠三郎（のち辰巳商会社長、故人）はこの間の事情についてこう語っている。

「高松というところは、地場産業がありません。ですから、よそへ出て職を探さなければなりません。われわれが第六回卒業生であることからわかるように、頼るべき先輩が少ない。当時の多くの学生がいろんな修養団に入ったのも、学生として地道な生活をしていることを見せて、自分の商品価値を高めようとする意識も半分あったのではないでしょうが、私もそうでしたが。卒業したとき、就職が決まっていたものはほとんどいなかったように思います。」

大平自身の文章によると、「私はつとに大学進学を決意し、家族に内証で一橋に入学志望の手続きをとっておいた。ところが、母は進学などは夢にも思っていない様子で、自ら出向いて同じ村の先輩で、当時『四国水力』の専務をしていた田中隆氏に、私の採用方をお願いしてあった。しかし世の中はたいへん不況で、同社としても、その年は新規採用を見合わせるということが、卒業間際になってはつきりした。進学の希望を打ち明けるべきかどうか、躊躇しているうちに時間は経過して、私はついに、進学と就職の双方の機会を共に逸してしまった。そうこうしている矢先、『イエスの僕会』を通して知遇を得ていた大阪の桃谷勤三郎氏から、私は一つの勧奨を受けた。

それは『佐藤定吉博士の発明にかかる薬品を企業化し、その収益でキリスト教の伝道の資にしたい。できれば、その仕事に参加しないか』というものであった。私は旧制神戸高商の今井嘉久君とともに、喜んでその勧奨に応ずることにし、卒業とともに上阪した。」（『私の履歴書』）

桃谷勤三郎（現桃谷順天館相談役）は、大阪に桃谷順天館なる化粧品会社を経営していた実業家で、キリスト教徒として、資金その他の面で佐藤定吉のかけがえのないパトロンとなっていた。

昭和六年夏、桃谷は、ある目論見を抱いてイエスの僕会が霊響山道場で開催する第五回浅間山麓修養会に参加した。桃谷は当時、さきの大平の文章にもあったように、佐藤定吉から、彼の創製した銀コロイドを主原料とするシルバースルと

いう薬品を大衆化して桃谷順天館から発売し、その利益を学生伝道に寄贈してほしいとの申入れを受け、この提案を受け入れることにしていたので、できればこの修養会に集まった学生の中から、一、二名を社員に採用したいと考えていたのである。

桃谷が、正芳と顔をあわせたのはこれが最初であった。桃谷は、修養会の四、五日間に、旧帝大はじめ官立高等学校の学生たち四十人ほどを観察したが、やがて正芳に目をつけた。

「大平さんは始め無口であり目立たない存在であったが、二こという時には機を逸せず発言し、雄弁ではないが的を射た発言をした。そこで私は、大平さんに、新薬品発売の企画を話して桃谷への入社を勧めたところ、大平青年は快諾して、翌七年春、卒業と共に来阪、帝塚山の私の家から、桃谷順天館に通われることになった。」(『基督教世界』昭和五十五年八月十日号)

桃谷は、「大平さんは、四国水力の方への話もあるが、伝道の資金をつくる会社ならその方を選ぶ」と即座に承諾されたのです」と語った。

もし、この桃谷の記憶が正しいとするなら、正芳は、『私の履歴書』に述べられているとはちがって、この夏の時点で、経済的に困難な東京商大への進学も、不況のために採用の不確かな四国水力への就職も捨てて、キリスト教伝道にかかわる仕事へのみちを選んだということになるであろう。そしてそれは、豊浜から観音寺へ、観音寺から高松へという彼の『都への東漸の道』をさらに一歩進めるものとなったのである。

昭和七年三月、正芳は高松高商を卒業した。在学中の彼の成績などについては、高松高商が昭和二十年七月の空襲で全焼し、学籍簿その他の書類が一切残っていないため詳しくはわからない。わずかに残されているのは、翌昭和八年春、正芳が東京商大を受験したさいに、商大の求めに応じて高松高商が提出した「調査書」(内申書に類するもの)だけである。

これには、一から十二までの記入項目があり、一から五までは、左翼的な言行がないかの調査であって、当時の風潮をうかがわせるが、もちろん記入は全部「無」である。ついで「六、本人ノ所属会名又八団体名一欄には、本校学友会語字

部”、七、性格、趣味、嗜好”欄には「一、温厚、謹真、熱心、眞面目、二、琵琶、庭球”、三、八、風貌、特徴”欄には「普通、ナシ”、九、本人ノ将来ニ対スル見込”欄には「修学ノ見込ミアリ”、一〇、家庭ノ情況及学資關係”欄には「父ナシ、母存、家業農、相当ノ生計ヲナス、学資八兄ヨリ受ク”、一一、学力、勤怠、健康概評一欄には「一、学力甲、精勤、二、壮健ニシテ修学ニ堪ユ”とあり、最後の「一二、其他”欄には「宗教的信念強シ”となっている。

就職した桃谷順天館では、月一度、聖書研究会が開かれていた。それには、佐藤定吉の高弟服部治（当時東京帝国大学講師）が講師をつとめていたが、正芳はその会の世話役にもなった。この研究会は社員の有志と外部の信者を合わせて三十人程度のものであった。

正芳と今井は桃谷の屋敷を仮事務所として仕事に取りかかったが、佐藤が発明したメンソレータムに似たこの薬品は、手や顔につけると色が真黒くなって、売物にならず、佐藤は金コロイドによる新しい製品の開発を約束した。正芳は、その間の閑暇を利用して、ナツシユの黄金律の翻訳をしたりして、二、三カ月の間、桃谷家の食客をしていた。（『私の履歴書』）

ナツシユはアメリカの洋服商で、マタイ伝七章十二節の「凡て人にせられんと思ふことは、人にも亦その如くせよ」という律法（黄金律）を守って成功したという人物である。正芳の訳したのは、このナツシユが自分の体験を記した自叙伝で、当時、救世軍の山室軍平などが推薦していたものであった。おそらく正芳は、はじめて事業をやるにあたって、このキリスト教実業家の経験を参考にしようと思つたのであろう。

正芳の桃谷家での待遇は、自分でも記しているように「食客」であり、食事も部屋まで女中が運んでくれて、いわゆる下宿よりは高級であり、また家族的でもあった。

ところが、新薬はなかなか商品化されず、伝道事業のために一生懸命こつとしていた正芳は、その意気込みをくじかれたかたちとなった。彼は今井とともに桃谷家から会社近くの寮に移り、広告部に属して外国の雑誌や広告文を翻訳しな

がら、新薬品の完成をあてどなく待つことになった。

当時の正芳の心境をあらわす手紙の一つに、この夏、高商時代の僕会仲間の村上欽二（のち村上木材社長）に宛てられたものがある。

「……御承知の如く、小生も、全く予想せざる急角度の運命の開展により、煙都の一隅に細々した数字と統計に玉の汗かく自分を見出しています。

……常に真面目に人生を眺めつつ……との御ほめの御言葉には恐縮します。真面目になりきれず、勝手なる許りを追求していますので、常になやんでいます。このなまぬるい胸の血潮の中に一脈の生命が是非ほしいものと、祈り求めています。とまれ、四角四面の冷たき論理の世界、象牙の塔の花園より永遠に放逐されしものです。『凡そ理論は灰色なり』とのメフィストの言葉を待つまでもなく、灰色の論理と角ばったヘリ、クツには用事はないはずで、出来るだけ事実の忠実に、大地の黙々たる厳かなる歩みに耳を傾けつつ、事実の論理に肉をつけつつ、歩ましていただきたいと心懸けています……。」

当時の青年の文章がとかく感傷過多であるということ割り引くとしても、『四角四面の冷たき論理の世界、象牙の塔の花園より永遠に放逐されしものです』と大学への進学は完全に諦めたことが表明され、手紙全体に感じられる憂鬱さは、明らかに自分の昨年の夏の決断が誤りだと知ったことを物語っている。新薬はついに開発されぬまま、正芳は秋を過ぎなければならなかった。

一方、正芳は、はじめての職場にあって、故郷の家族にも思いをはせていた。

妹富江は、「初めて大阪の桃谷さんに就職した時には、年に何回も贈り物をしてくれました。今度の給料では何を送ろうか、着物か、お小遣いか、それとも化粧品が欲しいか、と言ってきてくれて。私は着物が欲しかったので手紙を出したら、セルの着物を送ってくれました。それはそれはうれしくて、もう郵便屋さんがる頃だと、何回も道を見に行きました」と言っている。

しかし、結局この状態は長続きしなかった。「新薬品の企業化の仕事は、とうとう実を結ばなかったので、今井君と私はもう一度学窓に帰って再起を図ろうということになった。前記橋本清君の絶えざる激励と勧奨もあり、翌八年四月、今井君は神戸商大（現在の神戸大学）に、私は東京商大（現在の「一橋大学」）に入学した。」（『私の履歴書』）

橋本は、正芳が大学進学を決意したのは、その年の十二月頃だと述べている。

「もとより、私の家の家計は、私を大学に進学させるほどの余裕はなかったので、入学とともに、坂出市の鎌田共済会と、高松市の香川県育英会の双方から学資の貸与をうけることになり、両法人の好意で私の大学生活は始まったわけである。鎌田共済会は坂出市の鎌田家、香川県育英会は高松市の松平伯爵家の好意によってできた財団法人で、香川県の多くの人材が、この両財団によって進学のお恵まれた。私もその仲間に入れて頂いたことは、何としてもありがたいことであつた。」（同前）

桃谷は、「もし足りないようなら学資を出す」と言つたが、正芳は、はっきりと「行けます」と答えた。「強いてすすめるのも恩を売るようなので、出さないことにしました。順天館で働いた給料もあり、食費なども取りませんでしたので、いくらか貯金があり、その他育英会という方法、場合によっては家庭教師をやつて、と思つていたようです」。

この東京商大入試については、一つのエピソードがある。

正芳にとって、東京の抛り所は、前出の従兄の大平秀雄の家だった。秀雄は、陸軍大学を経て、当時、東京の中野の家をかまえていたのである。東京商大受験のとき、正芳は、この家を訪れた。秀雄の夫人すみの回想によると、昭和八年の三月に、正芳は、久留米餅に羽織、袴で、この家の玄関に姿をあらわした。

「ばくマサヨシです。実は大阪の化粧品会社へ勤めているんですが、ちょっと会社の用事で東京へ来たので、三、四日とめてください」。

正芳は、お土産に化粧品を持って来たが、翌日、国立の方に会社の仕事があるからと、出かけて行った。すみは、それを真に受けていたが、正芳は、去つてしばらくしてから、学生服に角帽姿で、ふたたびこの家の玄関にあらわれた。

こうして、正芳の大阪時代には終止符が打たれ、東京での新しい大学生活がはじまった。

それにしても、故郷を離れて、高松高商に入学して以来、大阪を出るまでの五年間は、正芳にとってどのような時代だったのだろうか。

大平は、社会人になってから、当時をこう回想している。

「昭和三年から五、六年頃にかけて母校に在学せし諸君は『イエスの僕会』なる団体の果敢な活動を記憶されてゐることと思ふ。それは当時全国の大学高専を遊説されて多数の共鳴者を獲ち得た工学博士佐藤定吉氏の自然科学宗教観に魅了せられた一群の学生の結社で、既成のYMCAの萎靡沈滞に対する反動も手伝つて或は校庭に或は街頭にこの群独特の活発な動きを展開してゐた。成程初期に於ては運動の焦点の見定めがつかず綱領自体に清算さるべきものもあつたので何かしら地につかない突飛な相貌を呈してゐたかも知れない。或は当時の学生層に喰入つてゐた一般的不安をかう言つた側面から発散させようとする一つのもがきとして一般に受取られてゐたかも知れない。しかしともかくこの群は一つの異様なゼンセーションを校の内外に捲き起し相当優秀な学生の多くを自己の陣営に迎へてゐた。そして彼等は抑へ難い内面的闘争と清算の過程を辿つて或者は基督教の正統に導かれ或者はこれを捨てて行つた。」(『又信』十四号、昭和十三年八月三十一日)

大平自身は『正統に導かれたもの』か、あるいは『これを捨てたもの』か、この文章ではどちらとも明らかにされていない。しかし、その後を見ると、彼は、聖書に親しんだ形跡は窺われるにせよ、キリスト者としての自らを強調したこともなく、ましてや伝道の拳に出たこともなかった。そういう点からするなら、おそらく右の一文は『イエスの僕会』に熱中した若き日の自分への別れの言葉であつたのであろう。